奈良・いかるが便り 6　棚機号　　影山　建樹

1、 悲しい知らせ

教職時代からずっとお世話になっている『互助新聞』。転居先まで送って下さって誠にありがたく、長年にわたって支えて来てくださった諸賢に心より御礼申し上げます。

隅から隅まで目を通させてもらっているが、近頃、気になるのは訃報欄で、今回は先輩お一人と後輩お一人のご逝去を知った。先輩だって八十歳前だし後輩はずっと手前。もっと長生きをと言いたいが、実際の人生では何があってもおかしくはない。若死にしてもそれはその一生ではないかと思うようになってきた。しかし、悲しい知らせである。

2、 葛うどん

以前に、奈良Ｂ級グルメ決定戦の結果を報告したが、私自身はそのいずれも賞味せずに済ませてしまった。味覚音痴の私では役に立たないが、今回、入選作の「吉野葛うどん」の説明書を入手したので報告する。

吉野葛は万葉の昔から知られるもので、山野に自生する葛根をすり潰し、寒水で澱粉を揉み出して水晒しして精製したもの。葛湯・葛粥・葛餅・葛豆腐・ぜんざい等々、料理や菓子に用いられてきたが、『葛うどん』は吉野葛と小麦粉を混ぜ合わせた細目の麺。昔から知られる三輪素麺の技法を生かし、腰があり、喉越しに優れた麺となった。冷麺にも温麺にも向くという。問合せ:天極堂(ﾃﾝｷｮｸﾄﾞｳ) 0120-77-4192　http: //www.kudzu/jp

3、 サウダーデ

ポルトガルへ行った時、五月のリスボンはジャカランダの花が満開で、街全体が紫色に染まっていた。また、ポルトガルの夜といえば「ファド」。小型のポルトガルギターを伴奏に切々たる情が巷のそこここにある酒場で歌われていた。

洋楽には大まかに『長調』と『短調』があるが、長調に多い正義・本道・努力・熱望など人生のプラス面と、それとは反対の孤独・悲壮・不運などや、成功者にも付きまとう「ひとはけの哀愁」等のマイナス面を持つ短調、この双方の表現技能が大切だといわれる。

日本語になりにくいこのマイナス情感を、ポルトガルでは「サウダーデ」といい、これを理解せずに音楽は出来ないという。ファドは民謡酒場であり、各国の人が同席していて、日本人向けの歌謡曲も披露してくれる。日本人歌手なら、控えめにくどくならないように歌うところを、ポルトガル・ファドは、切なく苦しく「これでもか、これでもか」と歌い嘆き続ける。まさしく『ド短調』の『ド演歌』である。

サウダーデはポルトガル以外の国でも「タスカー」「トスカ」など共通の内容を持つ言葉があり、勇壮な音楽や熱狂的な音楽でも、どこかにトスカがないと良い音楽、良い演奏と言えないという。日本にはこの情緒を訳す言葉はないのであろうか？

いや、「暗愁」「閑愁」などがそれに当たるという。しかし、今では死語に近い存在。ということは、今の日本人には情緒面で欠けやすい面があるということか？

リスボン・テージョ河口は、かつて世界一周を目指す男たちが出港した歴史を持つ港。そこに咲く「ジャカランダ」がＪＲ清水駅の「みなと口」にも植えられている。

4、古都の風景

古都奈良。さすがに平城遷都１３００年前の建物は残っておらず、古さで一番の法隆寺も再建説が定着している。ましてや、都市景観などはは、時代と共に変化していて当然である。「移ろい易く留まらず」は仏法の第一義。

私が最初に奈良へ来たのは昭和２７年か２８年と思うが、学生帽姿の写真が残るだけ。しかし、教職時代には数え切れないほど生徒を引率して奈良へ来た。教師というものは因果な商売。折角の観光地へ来ても生徒と共に遊んでいるわけには参らぬ。「安全が第一」で、「精神不安定な中学生の引率」ということが頭から離れない。そうした限られた中での体験から見て、最も変化した風景は西の京の薬師寺だと思う。

今とは反対の北側の駐車場から木立の中を歩いて薬師寺に入る。ここから薬師寺という区画がなく、突然に右に金堂(旧)左に三重の塔が現れる。そこに待ち構えていた坊さんが、大きな声で「清水市立○○中学の皆さん！こんにちわ！」というから生徒達は虚を突かれて魂を失う。お坊さんは立て板に水を流す如く、飛鳥・白鳳・天平の違いを写真例で示し、国宝の薬師三尊の素晴らしさ、「凍れる音楽」東塔の裳階から、地上では見えぬ水煙のことまでを見事に説明なさる。我々だって旅行前に何度も学習会を開いているのだが、この坊さんには適わない。子供が興味を引く流行語も入れて笑いを取り、帰校後の人気投票や感想文では他を押しのけて第一位となる。

その後、西塔が再建され、礎石に掘り抜かれた礎芯とそこに写る東塔に感服するなどの体験は失われたが、それ以上に大きな違いは、塔を囲む樹木が取り除かれ、回廊や大駐車場が出来て、南から眺める風景がすっかり変わってしまったことにある。現在は竜宮造りで美しく結構だし、建設に携わった西岡棟梁の話などに感心もするが、入江泰吉氏が撮った古い薬師寺の美しさ、醸し出される雰囲気を懐かしく思う気持ちも残っている。

5、 大和のお酒

私は『日本酒党』である。いや、あれこれアルコールの味覚遍歴をした結果などという立派なものではない。「この酒はどうか？」と問われても「旨い」「飲める」程度しか言えない日本酒党なのである。

息子が奈良に住まい、時折、大和の酒を送ってくれて、日本酒党は大和酒党になった。何と言っても麹の香りの良さが素晴らしいのがその理由である。鼻は一人前らしい？

奈良市街の東端を南下し天理市に近く、菩提仙川という清流がある。これが日本酒発祥の地だそうで、正暦3(992)年に創始された正暦寺なるお寺が建っている。現在の奈良の醸造所がそれとどのような関係があるか知らないが、全国に流通している酒に比べて、大和酒は個性が強い。香りも高いが値段も高く、晩酌を続けると空財布となる。

6、 新聞の読者文芸から　　（毎日、７０首ほども掲載されている••作者名は省略）

阿弥陀さま　今年の新茶　召し上がれ　　孕み鹿のそりのそりと横断す

亡き母の書作を掲げ風を入れ　　欲張った花見に行って　こけましてん

被災地でわが家を探し飛ぶツバメ　　東塔がトウトウ見えずなりにけり

白い花はさんで隣家と話けり　　子にもあり孫にも見えた我が短所

7、 和をもって川柳を造る『以和創句』

斑鳩といえば法隆寺。法隆寺は聖徳太子。太子の十七条憲法の第一条は「和をもって貴しとなす（以和為貴）」　そこで『和』を使って句を造るのはどうだろう。

（例）　和をもって励ましきたる朋友(とも)が居り　和しながら喧嘩しながら子供会
一年生「いただきます」と和して言う　囲みいる夕餉の膳の和気あいあい
この夏に行ってみたいな和歌の浦　和を旨に越えて至れり老夫婦

8、 奈良のワルガキ

新聞報道によると「春日大社の東側に広がる世界遺産・春日山原始林の立入禁止区域に侵入して焚き火をし、花火の発射をする者が後を絶たない」「遊泳禁止の吉野川に飛び込み、溺死する者が後を絶たない」そうで、わが家の廻りは暴走族が後を絶たない。

「死神は後ろから近付いて急に肩を叩く」というが、奈良特有の細く曲がって見通しの悪い道を走っていると、突然に「ブッ」と警笛が鳴る。バックミラーで見ると若い女が眼を三角にして速く走れとせかしている。しかし、安全は無視出来ないので注意は怠らぬ。やや広い通りに出ると、女は反対車線に出て追抜いて行った。その先の横断幕には大きく『ゆっくり走ろう斑鳩　ここはロマンと文化の街』とある。あの娘は字が読めねえんだな。

9、 久しぶりに音楽

孫が学校へ行くようになり、一日の生活ペースも落ち着いてきたので、懸案の荷物整理をゆっくりと再開、僅かにスペースを作ってキイボードを設置した。ここなら外への音の漏出は少なくて済む。初心者入門テキストの易しい曲から始めて、２０分ほど弾く。階下の家内には聞こえていたようで「久しぶりでいいね」というから、少し続けてみようかな。リコーダーは遠鳴りする性質があるから後回しにしておく。

10、 御殿蜂蜜の販売

我々が転居して間もなく「桜開花の時期」となった。「騎馬上看花」とは、洛陽の牡丹名所を、馬に乗って大雑把に鑑賞することをいうらしいが、奈良の桜、私は車で廻ってたくさんの桜名所を見ることが出来た。その一つが郡山城の桜である。

その昔、修学旅行で法隆寺から京都方面へ帰る際、金魚養殖地の先で郡山城の脇を通過することは知っていたが、桜の名所とは知らなかった。「郡山城さくら祭り」という催しに、混雑を覚悟の上で出掛けたが、城内は広くさくらは多く、駐車場にも苦労せずに観桜することが出来た。

郡山城の最初の城主は筒井順慶。次いで秀吉の実弟・大和大納言秀長が入って大きく発展したと言われる。明治新政府の破却により城内施設の大半を失い、放置されている所も見られるが、石垣に添って咲く桜は古木もあって素晴らしい。今回はその桜の蜂蜜を集めて販売されるという話。江戸時代に「御殿桜」という呼称があったことから「御殿蜂蜜」と名付けられ、養蜂業者が城跡内の桜の蜜を集め、フランス料理店の協力も得て成分調整なしの「ソメイヨシノ蜂蜜」となったという。

問合せ：大和郡山城内・柳沢文庫　☎０７４３－５８－２１７１

11、 奈良ホテル視察報告記

奈良ホテルといえば、明治に建てられた「関西の迎賓館」として知られる。since1909

奈良公園公道から情緒ある道を進んで駐車場へ。立派な黒塗りの車ばかり並び、運転手付きのようだから、アッシのボロ車ではチーット恥ずかしいが、勇気（そんなもんあるかどうか判らんけど）を振るって隣へ並べて『新館』から入らせてもらう。

有名な○○会社の役員会があるらしく。○○様御席の立て札が並ぶ。その先は結婚式の披露宴か？　全室が日本庭園に面して、オーク材を用いた大和文化の華やぎを表現した造りという。豪華な引き出物の見本は軽く見過ごして『本館』への通路を進む。

本館は奈良公園を借景に桃山御殿風檜造り。和洋折衷の融合美を百年以上も誇るという。

客室を覗く訳には参らぬが、応接室に入らせてもらう。大きな振り子時計は天皇陛下のアイデア。その脇には風格は堂々としているが可成り痛んだピアノがある。説明書を読むと、大正１１年(1922)に来日したアルベルト・アインシュタインがここへ宿泊した際に、バッハを弾いたピアノとある。戦時中に疎開して行方不明となっていたが、某社の倉庫に放置されていたものが発見され、当時のスナップ写真も見つかって、博士が弾いたピアノとして展示されるようになったという。だいぶ痛々しいが、ちょっと音を出させてもらう。ドイツ・アクションらしい手ごたえのある響き。調弦調律も良い。低音・高音にも触れてみたがほぼ良好であり、鍵盤を補修すれば演奏可能と思われる。

応接室を出ると昭和天皇を始めとして、このホテルに宿泊された皇族方の写真がたくさん張り出されている。記憶に残る有名人として、ピアニストのプロコフィエフ、飛行家リンドバーグ、喜劇王のチャップリン、ヘレン・ケラー、マーロン・ブランド、オードリイ・ヘップバーンなど。愛新覚羅溥儀も泊まり、ダライ・ラマ１４世も泊まっている。

ミーハー的・野次馬根性で宿泊料を調べたところ、インペリアル・スイートルームは、一泊が３４万６千５百円也。高いか？安いか？　いや、私の風体ではチェックイン以前にお断りを食らうだろう。

レストランの昼の日本食は２、５００円から。洋食は４、０００円から。夕食は倍以上である。土産物売り場のショウケースには高価で手が出せぬ奈良名産品が並んでいた。

大体を見て、本館の玄関から出ようとしたところ、ボーイが跳ぶように駆けて来て、最敬礼してドアを開けてくれたので、当方も胸を張り、ちょいと会釈して退出。表の運転手たちはちらりと視線を向けただけだから、悠々と愛車のエンジンを掛けて表へ出た。

12、 がんこ一徹長屋

唐招提寺と薬師寺の間に、近鉄「西の京」駅があり、その西側に「がんこ一徹長屋」がある。奈良の伝統工芸を受け継ぐ匠（たくみ）たちの仕事場で、現在の工房は茶筌(筅)、表具、一刀彫、赤膚焼、とんぼ玉、製墨、毛筆、それに近頃参加したという漆芸がある。こうした施設は、無心に打ち込んでいる製作過程を、こちらも黙って見せてもらうことを第一義とすべきである。しかし、匠の方にも見せたい語りたいの気持ちがあるから、ほどよい所で会話となる。見物人側が無作法だと、下らぬ質問でその場の雰囲気を損なってしまうが、うまく匠の話を引き出すと素晴らしい場となる。私は墨造り人としばしを語り合ったが、清水の紙安、四つ葉商会などで見かけた墨と筆を扱う人だった。入場無料。